

危機とパトス

——一九三〇年代の三木清と朴鍾鴻、朴致祐の哲学思想比較——

趙 熙 榮

I

この論文は一九三〇年代の日本の哲学者三木清と、その当時に日本の統治下にあった朝鮮の哲学者朴鍾鴻、朴致祐の危機論とパトス (Pathos) 論を比較考察したものである。

一九三〇年代は政治経済的に全く危機の時代であった。政治的にはイタリヤのファシズム、ドイツのナチズム、日本の軍国主義が台頭強化された時代であり、経済的には世界的経済恐慌に襲われた年代であった。帝国主義日本の支配下にあった朝鮮では、一九二九年十一月三日に光州学生事件が起こり、これに先立つ同年九月一日には高等普通学校の朝鮮語科目が廃止され、日本語常用が強制されるなど、抵抗と弾圧が激化し始めた時代であった。

一九三〇年代は世界的に全体主義的独裁、経済恐慌、戦争の前兆

などが現われ始めた時代であり、それにしがつて、危機感が高調した時代であった。

ドイツの哲学史家ヴィンデルバントが、「われわれは偉大な思想家たちの学説のなかで、その思想家自身の人格性の充盈⁽¹⁾よりも、むしろ概念的に圧縮されたその時代の理性内容を発見する」と書いているが、一九三〇年代の三木清と朴鍾鴻、朴致祐らは共に時代感覚に鋭敏であったので、その時代の共通関心事であった危機と危機意識について語り、且つ、その克服策としての実践のパトスの性格を論じている。

II

三木清は一九三二年十一月号の「理想」誌に『危機意識の哲学的解明』を書いたが、これによると、危機は特定の情勢である。

それでは、情勢とはどのようなものであるか？ 情勢の概念は環境の概念との比較によって適切に説明し得る。①環境の概念が靜態的であるのに対して、情勢の概念は動態的である。②環境は主体に対して外または側にあるが、情勢においては主体は情勢の中に一緒に居る。③植物と動物は環境の中に存在するが、人間は情勢の中で実践する。かくして危機とは特定の情勢である。危機は歴史の弁証法的發展における矛盾または対立の時期を意味する。

朴鍾鴻は一九三三年十月、東亜日報に載せた「矛盾と実践」という論文の中で、区別的側面で見えた事物の関係を差異関係、対立関係、矛盾関係の三種に分け、矛盾関係がもっとも対立が尖鋭化した状態だと説明した。そして危機とはわれわれが生存している現実の矛盾がその絶頂に到達した時期であるという。

朴致祐は一九三四年に刊行された「哲学」誌第二号に「危機の哲学」という論文を発表したが、この中で現実の主体的把握を強調しながら危機の問題を論じている。朴致祐によれば危機とは客体的矛盾が主体的に把握された特定の時期である。

III

三木清、朴鍾鴻、朴致祐の危機論は共に実践論につながる。彼らによれば、危機は実践によってのみ克服される。三木清と朴鍾鴻、朴致祐との相違は、彼らの置かれた状況の相違に従って同じく実践を唱えながらも実践の意味がもつニュアンスが異なる点で

ある。支配国の哲学者三木清は、一時マルクス主義的実践を唱えたかと思えば、いつのまにか、昭和研究会に属して「東亜協同体」の論陣を張り、侵略戦争による東亜新秩序建設を意味付けたが、被支配国の哲学者、朴鍾鴻、朴致祐らは実践的獨立運動によってのみ現実の矛盾と危機は克服され得る性質のものと考えたのである。⁽⁴⁾

それでは実践の主体である人間はどのような構造をもつものであるか？ それは Logos 的であると同時に Pathos 的である。

三木清の論文「イデオロギーとパトロギー」(一九三三)によれば、人間の意識はロゴスとパトスという相反するものによって弁証法的に構成されている。ロゴスの意識が高まれば対象意識が明瞭になるのに対して、パトスの意識が深まれば対象意識が喪失する。そしてパトスの意識が主体的意識である。実践に於ける主体的意識にはミユトスの要素がある。ミユトスの要素を含むことによって思想は信念の性格をもち実践的となる。以上の如く、三木清は実践のパトスの性格を明らかにしている。

朴致祐はロゴスの把握が真理性と関係をもつのに対して、パトスの把握は誠実性と関係をもつと見る。ロゴスの把握は学問的・態度的把握であり、事物を対体として認識する。これに対して、パトスの把握は生活的・交渉的把握であり、事物を生き生きとした対者として体験する。前者においてはその対体は死せるものであり、後者においてはその対者は生けるものである。傾きかけた

小屋を態度的視察は崩れかけた建物として認識し、交渉的態度は貧しい人たちが起居する所と体験する。そして、このようなパトスの把握が朴致祐の挙げる主体的把握の第一段階であるところの交渉的把握の様式である。しかし、この段階ではいまだに事物と和協的交渉関係にある。これから出発して、より情熱的な把握である矛盾の把握の段階と、もっとも情熱的な把握である実践的段階にまで到達しなければならない。

以上のように朴致祐は主体的把握を「身命を投げ打って情熱的に把握する把握様式」と規定し、交渉的・矛盾的・実践的把握の各段階を、把握における「情熱の強弱」、「誠実性の強弱」に従って高低を分けている。信念無しには情熱をもつことが出来ないから、この点において三木清と朴致祐の考えは一致している。しかし、両者の相違点は、三木清が実践におけるロゴスの要素を認めながらもパトスの要素をより強調したのに対して、朴致祐は最高の段階である実践的把握の段階でロゴスの要素が重要な役割をする⁽⁶⁾と強調している点である。朴致祐は実際における実践を盲目的にしない為には、思想に対するロゴスの検討を充分にした上でその思想に従って実践するようにとすすめている。

それでは朴鍾鴻はどのような見解を実践の問題に対して示しているか？ 朴鍾鴻は一九三三年七月に発行された「哲学」誌創刊号に載せた論文「哲学することの出発点に対する一疑問」において、知識を対象的知識と交渉的知識に分けている。これは、朴致

祐がロゴスの把握とパトスの把握を対比させたのと似ている。朴鍾鴻によれば、物との実際の交渉は対象的認識以前の第一次的・根源的交渉である。

朴鍾鴻は「哲学することの実践的地盤」(「哲学」誌第二号、一九三四)という論文において、ロゴスのなるものはテオリア的であるとして理論的という表現を与え、パトスのなるものは実践的であるとして感性的な面を重要視する。実践は感性的実践である。「内面的・情意的主体性」をもった人間が现实生活の中で感性的・社会的実践をするものである。ここに理論と実践の弁証法的統一が成立する。理論と実践の関係はお互いに対立し、制約しながらも実践は理論の指導を受けることによって発展し、発展した実践は更に新しい段階の理論を要求する。理論は実践を発展させると同時に自己を発展させ、発展した理論は更に新しい段階の実践を要求する。理論と実践はこのような段階を踏みながらお互いに発展して行く。ここに両者の弁証法的発展がある。理論はこのような弁証法的過程を経て漸次にその真理性に接近し、実践は自然発生的行動から理論的に自覚した高次の実践に及ぶものである。⁽⁷⁾以上のように、朴鍾鴻は理論と実践の弁証法、換言すれば、理性的なもの⁽⁸⁾と感性的なもの、すなわち、ロゴスとパトスの弁証法を説いている。

比較的言えば、三木清が実践におけるパトスの要素を強調し、朴致祐が実践的段階におけるロゴスの検討を重要視したのに比べ

て朴鍾鴻は両者の弁証法的統一を主張している。

IV

以上のような「危機とパトス」の問題がもつ意味の重要性は一
九三〇年代の時代的背景を無視しては理解し得ない。特に、朴鍾
鴻、朴致祐がこの問題と真摯に取りくんだのは、彼らが「無念
なる現実」の打開策を切実に求めたパトスの憂国の情の現われで
あろう。

(チョウ・ヒヨン、哲学、全南大学教授)

- (1) Windelband, W. Geschichte der Philosophie, in: Die Philosophie im Beginn des 20. Jahrhunderts (Heidelberg: 2 Aufl., 1907) S. 540.
- (2) 『三木清全集』第五卷(岩波書店、一九六七年)一五一—一九頁。
- (3) 朴致祐「危機の哲学」(「哲学」第二号、哲学研究会、一九三四
年)四頁。
- (4) もちろん、朴鍾鴻と朴致祐との間にも思想的立場の相違がある。
後日、祖國分断の悲劇と同時に、朴鍾鴻は民族主義者として、朴致
祐はマルキシストとして別々の道を行むことになるが、彼らの初期
思想である一九三〇年代の危機論ないし実践論にもその萌芽を認め
ることができよう。
- (5) 『三木清全集』第十一巻、二二二頁。
- (6) 『朴鍾鴻全集』第一巻、三二二頁。
- (7) 同書、三三二頁。
- (8) 同書、三三三頁。